

十八世紀初頭の英国における牧歌論

海老澤 豊

十八世紀初頭の英国で牧歌をめぐる論争が起きた。事の起こりは、1709年に書肆トンソンから出版されたアンソロジー『詩選集第六部』(*Poetical Miscellanies: The Six Part. Containing a Collection of Original Poems, with several New Translations*)である。その巻頭にはアンブローズ・フィリップス(Ambrose Philips, 1674-1749)の『牧歌集』(*Pastorals*)が、また巻末にはアレクサンダー・ポープ(Alexander Pope, 1688-1744)の『牧歌集』(*Pastorals*)がそれぞれ収められた。(1)ポープが主にウェルギリウスに準拠して黄金時代の羊飼いの生活を描くものに対して、フィリップスは必ずしもギリシアやローマの古典に盲従せず、スペンサーに倣って英国の羊飼いや自然や風物を登場させている。

アディソン、スティール、ティッケルらホイッグ派の文人は、同じホイッグのフィリップスを激賞し、特にティッケルは『ガーディアン』誌上で五回にわたってフィリップスの英国風牧歌を称賛する牧歌論を展開した。一方で黙殺の憂き目にあったトーリー派のポープは、同じ『ガーディアン』誌上で韜晦戦術を取りながらフィリップスの牧歌を非難する。またポープの盟友ジョン・ゲイも、フィリップスの詩風をもじって『羊飼いの一週間』を書いて応戦した。ここに至って牧歌をめぐる論争は、ホイッグ対トーリーの様相を呈することになったが、その背景にはフランスの批評家ラパンとフォントネルの牧歌論の対立があり、古典の作品と現代の作品のいずれが優れているかという新旧論争も絡んでいる。本論では主として彼らの牧歌論に焦点を絞り、それぞれの作品に関する考察は別の稿に譲る。

(1) ラパンとフォントネルの牧歌論

ジュズイット派の神父で批評家のルネ・ラパン(René Rapin, 1621-87)は、新旧論争においては古代派に属し、ホメロスやウェルギリウス、アリストテレスの『詩

学』に関する著作などがある。彼の「牧歌に関する論文」(“Dissertatio de Carmine Pastoralis,” 1659)は、『神聖な牧歌集』(*Eclogae Sacrae*)の序文にあたり、古典詩人の権威を絶対視する立場から書かれたものである。この論考は四部から構成され、第一部は牧歌の品位、古さ、起源、第二部は牧歌の性質、第三部は牧歌を書くための規則、第四部はその他の問題を扱う。ただし1684年に発表されたクリーチの英訳では、重要性が低いとして第四部は省略されているので、本論もそれに倣う。(2)

第一部でラパンは牧歌の品位から論を起す。彼は牧歌や羊飼いが野卑だという批判に答えて、ヘラクレスやヤコブやダビデも羊飼いであり、「古代人の中では最も善良かつ勇敢な者は常に羊飼いであった」と断言する。羊飼いの慎ましく簡素な生活は、はるばる東方に遠征したアウグストゥスや、敗北を喫したアントニーの境遇よりも幸福であったとして、牧歌は「誠実と無垢、平和と安楽、豊饒が野原に住んでいた、あの至福の時、あの黄金時代、無垢な状態の完全なイメージ」に他ならない。黄金時代が英雄の時代よりも好まれることは自明であるから、牧歌が英雄詩に優るのも当然である。確かに荘厳さと高遠さにおいて英雄詩は牧歌を凌ぐが、「素朴な端正さ、優美さ、美しい小粋さ」においては牧歌が英雄詩よりも卓越している。

次にラパンは牧歌の古さを論じる。「詩歌は世界と同じくらい古い」もので、歌うことが最初に始まったのは、始原の羊飼いが鳥の歌声や木々の囁きを模倣した時であった。これがやがて牧歌に結実し、時代を経るに従って、喜劇、悲劇、英雄詩が生まれていった。そこで牧歌の起源、すなわち最初の牧歌詩人は誰か、また牧歌の発祥地はどこかという問題が提示される。しかしラパンは古代人の雑多な意見を紹介するだけで、自らの見解は示さないまま、再び牧歌を黄金時代の簡素で無垢な羊飼いに結びつけて第一部を締めくくる。

牧歌の性質を扱う第二部の冒頭でラパンは、アリストテレスとホラティウスが牧歌について何も述べていないにもかかわらず、二人がそれぞれの詩論で語る「詩歌の一般的な観念」を手がかりにして牧歌を論じようとする。ラパンはアリストテレスの模倣説に倣って、牧歌は「羊飼いの行動、あるいはその性格の下で取ると思われる行動の模倣である」と定義する。

次にラパンは牧歌の主題に関して、アリストテレスとギリシアの牧歌詩人たちは何も語ってくれないと不満を漏らしながらも、牧歌は高遠な主題に挑むことも、逆に適切な主題から後退することも厳禁で、田園の事柄に関連づけるべきだと主張する。彼があげる主題は、無垢な愛、口論なしの競争、遊戯、冗談、安価な贈物など、「黄金時代の簡素」や「羊飼いの行動」に見合うものに限定される。このような立

場から、テオクリトスやウェルギリウスの牧歌には、必ずしも「純粋な牧歌」ではないものが含まれているとラパンは断言する。また牧歌の登場人物として「刈り入れ人、葡萄園丁、庭師、鳥撃ち、狩人、漁夫」などは好ましくない。なぜなら彼らは、羊飼いのように歌ったり、おしゃべりをする暇を持ち合わせないからである。

ラパンは牧歌の形式に触れて、ヘシオドスの『労働と日々』とウェルギリウスの『農耕詩』は、羊飼いの仕事に関わる事柄を多数扱っているが、形式の面で牧歌とは言えないと主張する。ラパンの考える牧歌の形式は、詩人の「語り」、羊飼いの行動による「劇的なもの」、両者の「混合」の三種類である。ただし「語り」は叙事詩に、「劇的なもの」は悲劇に適しているので、牧歌の形式に最もふさわしいのは「語り」と「劇的なもの」の「混合」であると結論される。

牧歌のみならず、あらゆる詩歌を構成する上で必要な四つの要素、すなわち物語、様式、思考、表現について、ラパンは次のように主張する。牧歌には物語が含まれなければならない、牧歌の様式は「田舎じみても宮廷風であってもいけない」。牧歌の思考は「平易かつ純粋」でなければならない、「深遠、繊細、入念な空想」を容れてはならない。牧歌の表現は「平易でやさしいが、優雅かつ端正、しかも言語が許す限りにおいて最も純粋」でなければならない。しかし同時にラパンは、テオクリトスがドーリア方言を用いたことに触れ、ラテン語にはその土地に固有の方言がないために、ローマ人はギリシア人よりも牧歌を書くのが難しいとも述べている。

ラパンは牧歌の性格について「簡素、簡潔、端正」をあげた後で、牧歌はいかなる虚飾や欺瞞もなかった「黄金時代の所産」であり、牧歌が描く「田園や羊飼いの生活のイメージ」は、「正直、率直、簡素」などの美德を読者に教えるのに最も適していると述べて、第二部の結論とする。

第三部は牧歌を書くための規則を扱う。ラパンは牧歌に関する規則を定めた者は誰もいないので、これは困難な仕事だと述べながらも、アリストテレスの『詩学』を手本に、テオクリトスとウェルギリウスの牧歌から例証を集めようとする。これらの規則はラパンがすでに述べたことの集約に近い。

牧歌の主題は「羊飼いの行動、あるいは羊飼いの資質に見合うか、適したもの」である。牧歌の形式は「交互に歌うか、一人で語るか、その混合」である。牧歌は主題が卑しいので、表現は「純粋で、やわらかに輝く」ことが必要である。そのためにはテオクリトスとウェルギリウスの牧歌から借用する他はない。牧歌の詩形には「英雄詩体」を選ぶべきであるが、叙事詩ほど強く響いてはならない。

牧歌の描写については、テオクリトスとウェルギリウスの間で相違が著しいので、

一般的な規則をあげることはできない。だが兩名とも対照法はよく用いているので、言葉や表現の繰り返しも同様に、牧歌に導入すべきである。羊飼いの性格は、黄金時代に暮らす者にふさわしく、「善と正義を愛し、愛想よく、親切で」でなければならず、恋においては「謙虚で貞淑」であるべきだ。この点に関する限り「テオクリトスには欠陥があり、ウェルギリウスはまったく当てはまらない」。つまり二人の牧歌に登場する恋人たちは淫らな放蕩者だというわけである。最後に重々しい句や哲学的な句は、羊飼いの口には適さず、唯一認められるのは「古い諺」だけである。

要約すれば、ラパンは「牧歌は黄金時代の羊飼いの行動の模倣である」という基本原理から、すべての規則を導き出そうとする。彼はアリストテレスやホラティウスを筆頭に、多数の古代人から論旨を借用しているが、彼らの権威に依存しすぎていることが欠点である。たとえば彼はテオクリトスとウェルギリウスの牧歌を神格化するあまりに、牧歌の表現において卓越する方法は二人の詩人から借用する以外にないと断言する。

ただし彼らの主題が黄金時代にふさわしくないとか、羊飼いの恋が淫乱だといった批判も時に見受けられる。これはラパンの定義が排他的であることを示している。彼はタッソーやゲーリーニの牧歌劇に登場する羊飼いは洗練されすぎ、一方でテオフラストゥスの描く羊飼いは野卑すぎると批判し、また羊飼いの代わりに漁夫や庭師を牧歌の主人公にすることを認めない。彼の提示する規則は牧歌の多様性を否定することにつながり、これに則って新たな牧歌を創造することは困難であるといえよう。

ベルナール・ル・ボヴィエ・ド・フォントネル(Bernard le Bovier de Fontenelle, 1657-1757)は劇作家コルネイユの甥にあたり、新旧論争では近代派の一翼を担った批評家である。彼の「牧歌の性質に関する論考」(“Discours sur la nature de l'églogue,” 1688)は、必ずしも古代人の権威に盲従することなく、己の理性に照らして是非を見極めようとする態度で書かれたもので、1695年にはモットーによる英訳が出た。(3)

フォントネルは「私はまず牧歌を書き、その後で理論を考えた」ために、「牧歌は自分の規則に従っていない」と明かしているが、これは後に英国の批評家に非難される原因となる。(4) 実作の後に理論を考えたというわりに、ラパンの牧歌論が秩序だった構成を取っているのに比べ、フォントネルの牧歌論は章立てもなく、系統だった論理構成を必ずしも取っていない。

あらゆる詩歌の中で牧歌は最も古く、羊飼いは人間の始めた最初の職業であった

という書き出しはラパンと同様である。しかしフォントネルは文明が発展して都市や国家が確立されると、田園に暮らす人々は都会の住人の奴隷という悲惨な境遇に陥ったと述べて、黄金時代を否定する。当時の羊飼いは貧しく落胆していたために、彼らの歌は慎ましく技巧のないものにならざるを得なかった。したがってテオクリトスの描く羊飼いが現実の羊飼いと異なることは明らかである。

近代派のフォントネルの牧歌論は、古代人の牧歌に対する批判に満ちている。テオクリトスの牧歌には「ある種の粗野な田舎ぶり」が見られ、第五牧歌のコマタスとラコンの歌合戦には現実の田舎の人間にふさわしい「罵倒と悪態」があふれている。第四牧歌は「田園の風物」をほとんど扱っていないために楽しめない。モスキュスとピオンの牧歌には田舎めいたところはなく、逆に繊細で優雅すぎるきらいがあるが、批評家たちはなぜ彼らよりもテオクリトスの野卑を弁明しようとするのか。どうやら学識ある者たち（古代派）はテオクリトスを牧歌の王に祀り上げると決めたようだ。

またウェルギリウスの羊飼いはテオクリトスよりも洗練されているが、第三牧歌の悪態に満ちた歌合戦では男色に関わる卑猥なほのめかしがある。だが同じ主題を扱ったカルプルニウスの牧歌では、歌合戦の判定者が悪態に怯えて逃げ出すという「すばらしい結末」を迎える。ウェルギリウスの第四牧歌は執政官ポリオを讃え、黄金時代の復活を描いているが、牧歌にはふさわしくない崇高な叙述にあふれている。だがカルプルニウスの牧歌では同じ性質の主題をもっと目的に適するように扱っている。

フォントネルは古代派に対する反感から、二流の牧歌詩人と比較することによって、テオクリトスとウェルギリウスの牧歌を故意に貶めようとしている。彼は「論考」の最後で「古代人を崇拜することで成立する一種の宗教を信仰する術学者たち」から冒瀆者呼ばわりされることは確実だが、テオクリトスとウェルギリウスを正当化するために「理性という自然の光」を曲げようとは思わないという強い決意を表明する。さらにフォントネルは、彼らが「存命中の詩人であるかのように」認めるべきは認め、批判すべきは批判したにすぎないが、それが冒瀆なのであろうと古代派を揶揄する。

一方で近代人は「羊飼いを野卑にするという罪」はめったに犯さないが、「牧歌で高遠な主題を扱うという罪」はしばしば犯している。ロンサールは牧歌で王侯を称賛する際に、崇高な主題に見合う崇高な文体を採用した。マンチュアヌスは「寓意的な」牧歌でカルメル会修道士を羊飼いに見立てて歌合戦をさせている。タッソー

の『アミンタ』はイタリアで最良の牧歌劇だが、「先鋭的な思考」に満ちている。

フォントネルは、「テオクリトスの羊飼いの野卑」と、「近代の羊飼いのあふれすぎる才知」の中間を保つべきだと主張し、羊飼いがどの程度の才知を備えればよいかを考察する。才知をそれほど備えていない羊飼いが、簡潔な文体ですばらしい考えを述べた場合に、読者は良い意味で期待を裏切られて喜びを得る。したがって羊飼いの口調は「ありふれてはいるが、粗野ではない」ことが望ましい。また牧歌では羊飼いの「省察」自体よりも、「省察」の伴った「行動」のほうが読者の心を打つ。

また羊飼いには「物語」や「語り」がよく似合うが、羊飼いが省察や議論に満ちた演説をすることは適切とは言えない。「描写」も長すぎてもならず、テオクリトスの第一牧歌ではティテュルスが盃の描写を延々と続けるが、これは限度を超えている。ウェルギリウスがしばしば牧歌に導入した「例え話」は、羊飼いがそれ以外では自分の思いを伝えられない時にだけ使うべきである。牧歌は仮面劇や舞踏会で身につける衣装に似ている。それは現実の羊飼いが普段着ている服より良い生地できており、リボンなどの装飾品がついているかもしれないが、カットは田舎風なのである。同様に牧歌の羊飼いの「思考」は現実の羊飼いよりは「洗練され、繊細であるべきだが、できるかぎり「簡素で田舎風の衣装」のごとくすべきだ。つまりフォントネルの結論は先に述べたことと同じで、牧歌の羊飼いは「現実の羊飼い」より洗練されているが、「宮廷や街の洗練された才人」になってはならないというのである。

しかしフォントネルの牧歌論で最も重要な点は、牧歌が読者に与える心理的な作用に触れた箇所である。牧歌が読者を楽しませるのは、田園生活と切り離すことのできない「閑静」の観念である。また人間はみな容易に幸福になることを願うが、我々がある種の「怠惰」を好み、あらゆる情熱の中で「愛」が最も好ましいことは確かだ。「閑静」と「怠惰」によって生み出される「愛」、これこそが牧歌的な生活の要諦なのである。したがって牧歌の登場人物として最もふさわしいのは、「怠惰」な牧歌的な生活を送る羊飼いに他ならず、「怠惰」ではいられない「農夫や草刈人や葡萄園丁や狩人」は不向きであり、サンナザロが「辛く厄介な生活様式」を持つ漁夫を牧歌の主人公に据えた理由が分からない。

また現実の羊飼いの生活は必ずしも良い面ばかりとは限らない。我々の想像力は真実がなければ喜びも起きないが、半分の真実で満足するものでもあるから、残りの半分は隠したほうがいい。このことについてフォントネルは次のように説く。

したがって「めくらまし」(illusion)と、同時に牧歌の心地よさは、羊飼いの生活の「静謐」だけを読者の目に晒し、「卑しさ」はごまかすか、隠すことで構成される。同様に「無垢」だけを示して「悲惨」は隠すのである。であるからテオクリトスが羊飼いの「悲惨」や「野卑」にやたらとこだわった理由が、私には理解できない。

この「めくらまし」は、牧歌や羊飼いをことさらに理想化することにつながり、黄金時代を否定したフォントネルではあるが、現実の羊飼いが牧歌の主人公にはなりえないという点においてラパンと変わらない。

ここでラパンとフォントネルの牧歌論を比較する。まず相違点をあげてみると、ラパンは牧歌を黄金時代の羊飼いの行動の模倣と定義し、古代派の立場から古典作品を必要以上に美化して自らの判断基準にする半面、近代の牧歌に対しては冷淡である。一方のフォントネルは自らの理性を判断基準として、牧歌においては読者に喜びを与える田園の閑静と怠惰が最も重要であり、「めくらまし」を用いて羊飼いの悲惨な面は隠すべきであると主張した。近代派である彼は古典作品にも多くの瑕疵があると指摘し、近代人の牧歌を積極的に評価する。コングルトンは「ラパンは古代人の作品によって自分の観念を吟味し、フォントネルは自分の観念によって古代人(近代人と同様に)を吟味する」と述べて、ラパンの方法論が「客観的」であるのに対して、フォントネルの方法論は「主観的、心理的」と要約する。(5)

このような違いはあるものの、詳細に両者の牧歌論を読み比べてみると、実は共通点も少なくない。牧歌は最も古い詩歌であり、最も古い職業は羊飼いである。牧歌は簡素や無垢を基本原理とし、羊飼いは野卑すぎても洗練されすぎてもいけない。牧歌の文体や表現、羊飼いの思考や行動も、この性格のうちに収まるようにすべきだ。牧歌の主人公には暇のある羊飼いが最適で、忙しい農夫や漁夫や草刈人などは好ましくない。テオクリトスとウェルギリウスの牧歌はすばらしいが、欠点がまったくないわけではない。このような点において両者はほぼ一致している。

二人の牧歌論においては、野卑と洗練の中間に位置する理想化された羊飼いが、中心を占めていることに気づく。この基準に照らすと、テオクリトスの卑猥な羊飼いは否定され、ウェルギリウスの牧歌に散見される戦争の惨禍には疑問符がつく。彼らは自らが理想とする純粋な牧歌に拘泥するあまりに、各々の定義に合わない牧歌は次々と批判されることになったのである。

(2) ドライデン、ウォルシュ、ポープの牧歌論

すでに触れたように、ラパンの「牧歌に関する論文」は1684年にクリーチによって、またフォントネルの「牧歌の性質に関する論考」も1695年にモットーによって、それぞれ英訳され、英国の詩人や批評家に大きな影響を与えた。コングルトンの図式によれば、ラパンの「擬古典主義的」な牧歌論の影響を受けたのは、テンプル、チェトウッド、ウォルシュ、ポープ、ゲイらであり、一方フォントネルの「理性主義的」な牧歌論の影響下にあるのは、アディソン、フィリップス、ドウ・ラ・ロッシュ、ティッケル、パーニーらである。(6) 新旧論争に深く関連した二人の意見の相違は、始めのうちこそ英国でも引き継がれるが、次第に彼らの牧歌論を否定するような発言も目立つようになる。

ドライデンが英訳した『ウェルギリウス作品集』(1697)には、『牧歌』の序文としてナイトリー・チェトウッド(Knightly Chetwood, 1650-1720)の牧歌論が収められている。(7) これはウェルギリウスの『牧歌』を擁護するとともに、ラパンの代弁者として、フォントネルの牧歌論に反論することを目的に書かれたものである。チェトウッドは牧歌は「最も古い」詩歌であり、「その性質の下で考えられる羊飼いの模倣」に他ならず、「黄金時代」以上に適した主題はないと、ラパンの主張をそのまま繰り返している。逆にフォントネルに対しては「最初に牧歌を書いてから規則を研究した」とか、テオクリトスやウェルギリウスの「美しさも優雅さも理解していない」などと批判する。

チェトウッドが牧歌の規則としてあげるのは「敬虔な雰囲気」、「古代の無垢と未熟な平易さ」、「牧歌的な情景」、「主題の多様性」、「主題に関する知識」、「自然で明晰で優雅な文体」、「きびきびとした簡潔さ」などである。この中にはラパンが触れていないものもあり、チェトウッドの独創性が感じられる。しかし「ラテン語はギリシア語の転化した方言であり、フランス語とスペイン語とイタリア語はラテン語から転化したもの」という一節には、古典の権威を絶対視するラパン譲りの態度が明確に表われている。

ジョン・ドライデン(John Dryden, 1631-1700)はテオクリトスの牧歌から四篇を選んで英訳しており、1684年の『詩選集』(*Miscellany Poems*)には第三歌が、また1685年の『叢林、詩選集第二部』(*Sylvae: or, The Second Part of Poetical Miscellanies*)には第十八歌、第二十三歌、第二十七歌が収められている。(8) 『叢林』の序文でドライデンは、テオクリトスが最高の牧歌詩人として他の追従を許さ

ないのは、彼の「模倣できない情熱の穏やかさ」と「牧歌にふさわしい言葉で情熱を自然に表現すること」、つまり「簡素」が彼の作品に行きわたっている点であると指摘する。ウェルギリウスの羊飼いはエピキュロスとプラトンの哲学に精通しすぎているが、テオクリトスの羊飼いは「田園の教育」からはみ出すことはない。またグアリーニの羊飼いが宮廷で育ったように思われるのに対して、テオクリトスとタッソーの羊飼いは「森から決して離れない」。テオクリトスのドーリア方言は「田舎風の比較できない甘美さ」を備えており、これはラテン語の厳格さに縛られたウェルギリウスが模倣できなかった点である。(9)

またドライデンは1684年の『詩選集』にウェルギリウスの第四および第九牧歌の英訳を収めたが、1697年の『ウェルギリウス作品集』(*The Works of Virgil in English*)では全十篇を英訳し、その献辞でウェルギリウスの牧歌を論じている。同じ『作品集』に収められたチェトウッドの序文がラパンの代弁に等しいのに対して、ドライデンはフォントネルを「フランスの生ける栄光」と呼んで称賛する。だがドライデンはフォントネルの牧歌論を全面的に採用したわけではなく、あくまでも自らの判断に拠った批評をしている。(10)

『牧歌』はウェルギリウスの詩歌における初めての試みであるが、第四牧歌では『農耕詩』や『アイネーイス』を思わせる大胆さや崇高さが見られる。ただし壮麗な詩行の中にも「一種の田舎じみたところ」があり、森や草地のイメージとあいまって、ウェルギリウスは詩人を農夫と廷臣の中間に設定していると思われる。テオクリトスの「野卑な方言」には秘かな魅力があり、ウェルギリウスも模倣しようとしたが、ラテン語の特性がそれを許さなかった。第六牧歌にはルクレティウスやエピキュロスの影響が感じられ、第八牧歌の牛飼いは少々学識を持ちすぎているが、これはテオクリトスから借用したものに他ならない。だが第三牧歌の巧みな彫刻の施された大杯に関する詩行で、彼は浮き彫りにされた人物の一人の名前を故意に失念しており、羊飼いが決して偉大な学者ではないことを示そうとしている。

グアリーニの『忠実な羊飼い』には学識のわざとらしさが目立ち、タッソーの『アミンタ』はより自然にあふれており、サンナザロの『漁夫牧歌』は墮落したラテン語で書かれているために批評には耐えられない。しかしスペンサーの『羊飼いの暦』は現代語で書かれた牧歌の中でも比類すべきものがなく、彼はテオクリトス、ウェルギリウスに次ぐ第三の牧歌詩人である。チョーサーの英語に精通したスペンサーは「北方の方言の巨匠」であり、テオクリトスのドーリア方言を正確に模倣している。

さらにドライデンは1699年に詩人を志望する上流婦人に宛てた書簡で、ウエルギリウスの『牧歌』を「あまり信用しすぎない」ように勧め、テオクリトスは「思考の穏やかさと表現の簡素さ」において彼をはるかに上回っていると述べている。(11) このようにドライデンの態度は一貫しており、ラパンの「黄金時代」説やフォントネルの「めくらまし」説などには眼もくれず、翻訳の経験から得た自分なりの結論を導き出していると言えよう。

ウィリアム・ウォルシュ(William Walsh, 1663-1708)は、32歳年上のドライデンから「お世辞でなしに我が国の最良の批評家」と称賛され、(12) また25歳年下のポーブに対しては文学上の師として、彼の『牧歌集』を添削するなど大きな影響を与えた。1736年に出版されたウォルシュの『作品集』の序文には、牧歌に関する一節が含まれている。(13)

愛に適した三種類の詩歌(牧歌, エレジー, 抒情詩)の中で、牧歌は「最も低級」であるがゆえに最も愛に適している。牧歌の韻律は「緩やか」で、思考は「単純, 気楽, 慎ましく」あるべきだ。牧歌は「羊飼いの生活」を描くことにあり、羊や野原について語るだけではなく、田園生活に伴う「真理, 誠実, 無垢」を示さねばならない。我々は常にテオクリトスとウエルギリウスに敬意を払っているが、両者は必ずしも「無垢」に順応していない。テオクリトスの「ダフニス」(第一牧歌)の愛は淫らであり、ウエルギリウスの「アレクシス」(第二牧歌)では少年愛を表明しているからだ。ダフニスが謙虚で、アレクシスが女性であったならば、もっと愉しめたであろう。この一節についても、ラパンが羊飼いの恋は「謙虚で貞淑」でなければならず、この点で「テオクリトスには欠陥があり、ウエルギリウスはまったく当てはまらない」と述べたことの受け売りにすぎない。ウォルシュは「黄金時代」についてはまったく触れていないが、基本的にはラパンと同じ牧歌観を持っていると見なして差し支えない。

若き日のポーブは、ウォルシュから「偉大な詩人は何人もいるが、正確で偉大な詩人は一人もいない。だから君は正確さを研鑽し、目的としてほしい」と忠告されたという。(14) また1705年4月のウィチャリー宛書簡で、ウォルシュはポーブの『牧歌集』について「大いに満足して何度も読み返しました。序文は思慮分別に富み、学識もあります。詩行は穏やかで易々と流れています。著者はこの種の詩歌に格別の才能を持っているようで、判断力はあなたから聞いた彼の年齢を大いに超えています」と褒めちぎっている。(15)

ポーブの『牧歌集』は1709年の『詩選集第六部』に収められたが、1717年の『ア

レキシサンダー・ポープ氏作品集』(*The Works of Mr. Alexander Pope*)では序文として「牧歌論」が追加された。ポープの論考は独自のものとは言えず、自注で明らかにしているように、ラパンやフォントネルらの牧歌論を集約したものになっている。まず詩歌の起源は原初の時代に遡り、羊飼いは世界最古の職業であるから、牧歌こそ最古の詩歌であるとされる。牧歌は「羊飼いの行動や、その性格の下で取られると思われる行動の模倣である」と定義され、その形式は劇的なもの、語り、両方の混合の三通りになる。物語は純朴で、語り口は洗練と粗野どちらに偏ってもまずく、思考は平易で、表現は慎ましくあるべきだ。つまり牧歌においてはすべてが「簡素、簡潔、繊細」でなければならない。

牧歌は「いわゆる黄金時代のイメージ」であるから、現在の羊飼いのありのままの姿ではなく、最良の人々(王侯)がこの職業に就いていた頃の姿を描くべきである。このため往古の天文学や信仰を取り入れ、作詩においては古風な趣きを残しておくといよい。当時の詩歌は「暇な時」の手遊びであり、「田園生活の静謐さ」ほど羊飼いという職業にふさわしいものはない。したがって牧歌では羊飼いの生活の良い面だけを描き、悲惨な面は隠すという「めくらまし」を採用する必要がある。個々の牧歌は特定の情景と結びついた独自の美を持つべきで、多様性を得るためには自然に対する呼びかけや脱線なども有効である。リフレインを用いて音楽性にも留意すべきだ。

ここまでを要約すれば、牧歌はラパンに倣って「黄金時代」の羊飼いを描くべきであると同時に、フォントネルが主張するように羊飼いの悲惨な面は隠すという「めくらまし」を用い、田園生活の「静謐さ」を強調しなければならない。しかしラパンとフォントネルの主張には相容れない点もあるため、ポープの論理は必ずしも一貫しておらず、両者の論旨を巧みに統合したと評価することもできない。

「牧歌論」の後半は過去の牧歌詩人に関する論考である。テオクリトスは「自然と簡素」において他の詩人を凌ぐが、羊飼いの代わりに「草刈人や漁師」を牧歌の主人公にしたことはいただけない。描写は冗漫になりがちで、ドーリア方言には誰も模倣できない魅力があるが、語り口は無作法かつ「田舎風」に傾いている。一方ウェルギリウスはテオクリトスより洗練され、判断力は優っており、「規則性と簡潔さ」において凌いでいるが、「文体の簡素さと適切さ」に欠ける。タッソーの『アミンタ』は優れた「牧歌的喜劇」であるが、古代人の模倣と考えることはできない。スペンサーの『羊飼いの暦』は寓意的でありすぎ、簡潔さを大いに欠いている。彼の用いた古語や方言は「田舎風」で「田舎臭い」。牧歌と暦を結びつけて、人間の生

活をさまざまな季節になぞらえたことは独創的だが、十二ヶ月という区分はあまりにも多すぎるために描写が似通ってしまう。

最後にポーブは自作の牧歌について解説する。以下の四篇は牧歌にふさわしいと思われるあらゆる主題を包括し、スペンサーの創案を改善して、各篇にはそれぞれに固有の季節、時間、情景、人間の年代、その年代に対応する感情が盛られている。これらの作品に長所があるとすれば、それは古代の詩人たちを十分に研究し、手間を惜しまずに模倣した結果にすぎない。(16) ポーブの「牧歌論」には擬古典主義的な傾向が顕著に認められる。彼が「規則性と簡潔さ」に優れ、「洗練された」ウェルギリウスを模倣すべき手本としたことは明らかで、逆にテオクリトスとスペンサーは古語や方言を取り入れたために「田舎風」であるとして退けられる。この「田舎風」という語は、後にポーブがフィリップスの牧歌を攻撃した際にも使われており、両者の立場を峻別する上で重要である。

(3) フィリップスとティッケルの牧歌論

フィリップスの『牧歌集』のうち四篇(現在の第三、第一、第二、第四牧歌)は、イライジャ・フェントンの編纂した『オックスフォード・ケンブリッジ詩選集』(1708)に匿名で収録された。(17) これに二篇を加えて再構成された六篇が、フィリップスの名を記して『詩選集第六部』の冒頭を飾った。アディソンは1710年8月のフィリップス宛書簡で「喜びにあふれながら『牧歌集』を何度も読み返しました。君が加えた改訂はとても巧みで好ましく思います。君は羊杖を持ったすばらしい手をしている(中略)君がスペンサーやウェルギリウスという手本に倣って、牧歌集を何かもっと偉大な作品の序曲にするよう期待します」と記している。(18)

後に論敵となるポーブでさえも1710年10月の書簡で、フィリップスに高い評価を与えていることは見逃せない事実である。ポーブは「第一牧歌がずばぬけて最良で、第二牧歌が最悪」であり、「第三牧歌は大部分がウェルギリウスのダフニスからの翻訳」にすぎないが、「良い出来だと思ふ」(この文言は後にポーブによって削除された)と述べている。さらに第五牧歌については語調が「牧歌にしては高遠すぎる」と不満を漏らしながらも、全体として「我々の言語でこれより良い牧歌はないというタトラーに賛成だ」と結論している。(19)

フィリップス自身は牧歌論争において何ら発言をしていない。そのため1709年版で初めて公にされた『牧歌集』の「序文」は、三百語にも及ばない小文ではあるが、

彼の牧歌観を探る上で唯一の貴重な資料になっている。まずフィリップスは「短詩の中で最も重要」と考えられてきた牧歌が、現在では尊重されていないことは不思議だが、「主題の無垢さ」が人々の関心と呼ばないのではないかと不安を漏らす。しかし牧歌の舞台となる田園は、絵画と同様に詩歌においても「最も愉しませる情景や、最も喜びにあふれた景色」をもたらす。また鳥の「技巧のない」歌声が自然の安らかさに満ちているように、牧歌は精神に「甘美で穏やかな落ち着き」をもたらし、一方で叙事詩や悲劇は精神に大いなる熱情をもたらす。さらに堂々たる宮殿は崇高の念で我々の魂を満たすが、フィリップス自身は野原や森や川を眺めると言葉にならない満足を感じ、良き運命が「甘美な隠棲」を与えてくれることを願わずにはいられない。最後に彼は「テオクリトス、ウェルギリウス、スペンサー」だけが牧歌の本質を把握していた詩人であり、自分がこの牧歌集で失敗さえしなければ、大いなる榮譽に与るであろうと締めくくる。(20)

この「序文」は田園生活の「隠棲」を協調するなど、全体的にラパンよりフォントネルに近い論調であると言えよう。ただし他の「牧歌論」のように牧歌を書くための規則を定めるという意図はなく、あくまでフィリップスの自説を開陳するに止まっている。アディソンはフィリップスに宛てた1704年の書簡で「君の二篇の牧歌」に触れ、「君の牧歌に関するささやかなエッセイにいたく満足し」、「君は実践においてと同様に理論においても実に正しい」と記している。(21) この「エッセイ」は1709年版の「序文」の原形と推定される。40年後の1748年版でもわずかな語句の異同がみられるだけで、フィリップスの基本的な主張はまったく変わっていない。牧歌論争が盛んだったのは1710年代のことであるから、1748年版でポープに対する反論が見られてもよさそうなものだが、「序文」に関する限り論争の影響は皆無に等しい。ただし「序文」においてもポープとの相違点は明らかである。フィリップスは牧歌の主題が「無垢」であると述べているが、ポープのように「無垢」を黄金時代に関連づけることはない。フィリップスが眺めるだけで満足を感じるという「野原や森や川」は、明らかに英国の自然であるからだ。またフィリップスは三人の優れた牧歌詩人のうちにスペンサーの名前をあげている。これはポープがスペンサーの『羊飼いの暦』について、冗漫すぎ、寓意的すぎるなどと批判しているのとは対照的である。

アディソンは『スペクテイター』第223号(1711)で、フィリップスの「称賛すべき牧歌集」はすでに好評をもって受け入れられていると述べ、第523号(1712)では異教の神々を英国の詩歌に導入することの是非を問いながら、フィリップスが古典神話

の代わりに「英国の羊飼いの間に行きわたっている迷信的な神話」を採用することで、牧歌に「新たな生命とより自然な美しさ」を与えたと称賛している。(22)

トマス・ティックル(Thomas Tickell, 1685-1740)は1713年に『ガーディアン』誌上に五回にわたって牧歌論を連載した。(23) 第22号では牧歌の本質を扱い、ティックルは冒頭で牧歌が「我々が現実になることを望む幻」であると主張する。原初の世界で人間は羊や牛を飼い、富裕と安楽、無垢と満足を得て暮らしていたが、彼らの生活は必ずしも洗練されたものではなかった。したがって牧歌詩人は「空想の中で」完璧な安楽と静謐に満ちた田園の情景を形作るべきであり、卑しいものや悲惨なものは覆い隠して「一部の真理」だけを示さなければならない。牧歌のもたらず「快い幻惑」が読者を喜ばせる理由は三つある。第一に我々は安楽や静謐を好み、第二に我々は無垢と簡素を称賛し、第三に我々は田園を愛するからである。

第23号は羊飼いの性格について論じる。羊飼いの精神は粗野で洗練されていないと仮定されるが、ある程度までは良識と才知を備えた存在として提示することができる。したがって真の羊飼いの性格は、自分の感情を「平易な描写」で伝え、その行動は「簡素かつ無垢」であり、「迷信を含む何らかの信仰」を持ちあわせ、ことわざ風の文句を使用する。

第28号ではギリシア、ラテン、イタリア、フランスの牧歌を通観する。ウェルギリウスは確かに最良の詩人であるが、無垢や簡素などを特徴とする牧歌に関する限りテオクリトスが彼を凌いでいる。イタリアではタッソーとグアリーニが傑出した牧歌劇を書いているが、「人を驚かせる奇想やもって回った想像力」が目立ち、彼らには牧歌に対する真の鑑識眼が備わっているとは言えない。サンナザロの漁夫牧歌は、文体と思考において優れているかもしれないが、田園の甘美な風習や快い対象を、海岸の「心地よくなく恐ろしいもの」に変えてしまった。フランス人の書く牧歌はありきたりの描写が延々と続き、華美に走る傾向が強すぎる。

第30号は英国の牧歌を論じたもので、ティックルは冒頭で英国を「牧歌に適した情景」として推奨すると宣言する。英国の牧歌詩人の大半は古典を尊重するあまりに、ギリシア人やローマ人から「すべてを盗むか、彼らの作法や習慣を隷属的に模倣する」ために、実に馬鹿げた作品しか生まれない。牧歌には確立された性質があり、「田園の情景や無垢や簡素」を欠くことは許されないが、習慣や慣習、気候や土壌、果実や花については変えられる性質のものである。なぜならば「アルカディアやイタリアにふさわしいものが、もっと涼しい国では実に馬鹿げたものになってしまう」からである。

かくしてティッケルは、古典牧歌の「パエストゥムの薔薇」や「豊饒の角」を退け、「キンボウゲ」や「ゴシキヒロ」など英国の動植物を登場させたフィリップスの牧歌を称揚する。また古典神話の神々は確かにすてきだが、「妖精やゴブリンや魔女」など英国に固有の迷信を使うべきである。ここでティッケルは妖精などが描かれた例として、こともあろうにポープの「一月と五月」の一節を引いている。この作品はチョーサーの「商人の話」を翻案した長編詩であり、フィリップスとポープの『牧歌集』が収められたのと同じ『雑詩集第六部』に掲載されている。ポープの古典に倣った牧歌ではなく、チョーサーの翻案を引くあたりは、ティッケルの意地の悪いあてこずりと見るべきだろう。これに対して、第30号で三回引用されるフィリップスの牧歌は、いずれも優れた英国風牧歌の手本としてあげられている。

続いてティッケルは「ことわざ風の文句、羊飼いの服装、習慣、戯れ」においても英国風の様式に倣うべきだと主張し、古代人からの改変を導入すべき理由として「詩歌は模倣であり、模倣は最も容易に読者をだますことが最良なので、最も親しみやすい、一般に知られている習慣を取り上げなければならない」からだと言及。最後にティッケルはここで示した規則は「我らの同国人スペンサーとシドニー」から引き出されたものだと述べている。

牧歌の歴史をたどる寓意的な物語になっている第32号でティッケルは、アルカディアで幸福に暮らしたアミンタスとアマリスの子孫の系譜として、テオクリトス、ウェルギリウス、スペンサーの名をあげ、「スペンサーは長子フィリップスによって継がれた」と記している。おそらくはこの記述が決定打となって、牧歌詩人として完全に無視されたポープの怒りを買って、トーリー側の反攻を招くことになったのである。

(4) ポープとゲイの牧歌論

『ガーディアン』第40号に掲載された牧歌論の冒頭には、「フィリップス氏と同じ巻で公刊された牧歌の著者（ポープを指す）に言及しなかった偏向性を責められている」という一文があり、一見するとティッケルが第32号の続きを書いたような印象を与えるが、実はポープが韜晦戦術を用いて書いた巧妙な自己弁護に他ならない。
(24)

ポープは言う。牧歌の理念は黄金時代の慣習から取られ、その倫理は無垢の表出に基づくべきであり、この意匠から外れた作品は真の牧歌ではない。ウェルギリウ

スの『牧歌』で真の牧歌と呼べるのは第五牧歌と第七牧歌の二篇のみで、同様にテオクリトスの『牧歌』で牧歌と見なされるのは十一篇しかない。彼らの作品集は牧歌集というよりもむしろ詩選集であるからだ。だがフィリップスの牧歌は「すべてが牧歌を意味するわけではない」という点において両者を凌いでいる。

牧歌の巨匠となるためには古代および現代の著者を大量に読むことが不可欠だが、ポーブは古代人から秩序も方法もないままに模倣した表現をあちこちに散りばめている。これに対してフィリップスの第三牧歌には、ウエルギリウスの第五牧歌を入念に研究した痕跡が明らかに認められる。これは先に紹介したポーブの書簡にも記されている指摘であるが、フィリップスが剽窃に近い模倣をしているという批判である。

簡素こそ牧歌の際だった特徴であるが、ウエルギリウスの文体は典雅であることが欠点である。ポーブも同じ罪を犯しており、彼の羊飼いは田園にふさわしい簡素な会話を交わさず、名前もテオクリトスやウエルギリウスからの借用である。一方でフィリップスはスペンサーに倣って英語の古語を用い、羊飼いの名前も英国の田園にふさわしいものばかりである。同様にフィリップスは自分の牧歌に英国の動植物を導入しており、薔薇と百合と水仙が同じ季節に咲くという詩的な創造を成し遂げている。

この論考でポーブが自らを古典詩人の正当な末裔として描き、一方でフィリップスの英国化された牧歌に対して秘かな嘲笑を浴びせているのは明らかだろう。ポーブはフィリップスの牧歌から出来のよくない詩行を引用し、自作と並べて比較してみせることによって、いかにフィリップスの牧歌が古典的な簡素や無垢から離れているかを示そうとする。一例をあげよう。まずはフィリップスの第六牧歌からの引用で、ホビノルの歌に対してランケットが答える。(25)

Hobb. As *Marian* bath'd, by chance I passed by;
She blush'd, and at me cast a sidelong Eye:
Then swift beneath the crystal Wave she try'd
Her beauteous Form, but all in vain, to hide.

Lanq. As I, to cool me, bath'd one sultry Day,
Fond *Lydia* lurking in the Sedges lay.
The Wanton laugh'd, and seem'd in haste to fly;

Yet often stopp'd, and often turn'd her Eye. (ll. 69-76)

マリアンが水浴した時、私が偶然通りかかった。
彼女は赤面し、私を横目でちらりと見た。
そして澄んだ水の下に彼女はすばやく潜り、
美しい肢体を隠そうとしたが、無駄だった。

ある暑い日に私が涼もうと水浴びしたら、
愛しいリディアが菅の茂みに潜んでいた。
お茶目な子は笑い、急いで逃げるようだが、
何度も立ち止まって、何度も目を向けた。

次はポーブの第一牧歌「春」の一節である。まずストレフォンが、次にダプニス
が歌う。(26)

Streph. Me gentle *Delia* beckons from the Plain,
Then hid in Shades, eludes her eager Swain:
But feigns a Laugh, to see me search around,
And by that Laugh the willing Fair is found.

Daph. The sprightly *Sylvia* trips along the Green,
She runs, but hopes she does not run unseen,
While a kind Glance at her Pursuer flips,
How much at variance are her Feet and Eyes! (ll. 53-60)

私の優しいデーリアは野から手招きし、
木蔭に隠れ、彼女に御執心の若者をかかわす。
だが笑いを装って、私が探し回るのを見ると、
笑い声によって、同意する美女が見つかる。

活発なシルビアは緑地に沿って軽やかに進む、
彼女は走るが、走る姿を見られたいのだ、

優しい眼差しが彼女を追う者に投げられる間、
彼女の足と目は何と矛盾していることか。

両名ともウェルギリウスの第三牧歌を模倣したものと考えられる。該当箇所をド
ライデンの英訳で引く。(27)

My *Phyllis* me with pelted Apples plies;
Then tripping to the Woods the Wanton hies:
And wishes to be seen, before she flies. (ll. 97-9)

私のフィリスは私に林檎を投げつけて、
気紛れな娘はつまづきながら森へ急ぐが、
逃げ去る前に見られることを望むのだ。

ウェルギリウスの牧歌で娘が恋する男に林檎を投げつけるのは、テオクリトスの
第五牧歌の一節「山羊と一緒に通り過ぎる時、クレアリスタも山羊飼いに林檎を投
げつけて、甘い口笛を吹く」(With apples too Clearista pets the goatherd as he
passes with his flock, and sweetly she whistles to him, ll. 88-9) の借用で
ある。(28) ただし娘が逃げる前に姿を見せて男に追いかけさせるという恋の手管は、
ウェルギリウスが追加した部分であり、これをポープとフィリップスはさらに敷衍
しているわけである。

だが両者の間には相違が認められる。ポープの描く恋人たちは他愛ない恋の戯れ
に終始しているが、フィリップスはいずれも水浴の場面を扱っており、マリアンは
ホビノルに裸身を見られ、リディアはランケットの裸体を覗き見している。ポープ
がフィリップスの「二人の羊飼いは恋する娘たちの行為を無垢に描いている」と逆
説的に揶揄するように、フィリップスの牧歌はポープが規定する牧歌の範疇(無垢
の表出)を逸脱している。だが引用した両者の詩行で巧拙に差があるとも思われな
い。二人の牧歌の相違点は、ポープが自らに課した古典的で抑制された風雅を尊ぶ
一方で、フィリップスは羊飼いたちの少々野卑ではあるかもしれないが、自然な姿
を描き出しているという点にある。

さらにポープはフィリップスの牧歌に散見される、馬鹿げた詠嘆表現や世俗的な
諺を攻撃するが、最大の的はスペンサーに倣ってフィリップスが用いた方言である。

ポープはサマセットシャーの方言で書かれた「牧歌的バラッド」なる作品を古い手稿の中から見つけたと称し、自然さと簡素さのために「完璧な牧歌」だと褒めちぎる。これは女羊飼いシシリーが恋人のラジャー（ロジャーの訛か）と痴話喧嘩をするという物語風の拙劣な作品だが、ポープはスペンサーとフィリップスがこれと同じ路線を歩んでいると決めつける。一方でポープは二流の牧歌詩人モスキュスやビオンと等級に属し、ポープの牧歌はウェルギリウスのある牧歌がそうであるように、決して牧歌ではなく「もっと優れたもの」なのだと宣言して稿を終える。

ラパンやウォルシュの系譜を継いで古典牧歌を模範とするポープが、フォントネルやティッケルの影響を受けて牧歌を英国化しようとしたフィリップスを批判するのも当然と言えよう。これは牧歌をめぐる路線対立であると同時に、アディソンやスティールやティッケルといったホイッグ派が称揚するフィリップスに対する、トーリー派ポープの嫉妬まじりの攻撃でもある。このように書くとポープが孤立している印象を与えるかもしれないが、ポープに助勢する強力な援軍がすぐに現れたのである。

ジョン・ゲイ(John Gay, 1735-1732)は、ポープ、スウィフト、パーネル、アーバスノットらとともにトーリー派のスクリプレラス・クラブを結成した詩人で、特にポープとは肝胆相照らす仲であった。ゲイが1734年に発表した『羊飼いの一週間』(*The Shepherd's Week*)は、フィリップスの英国風牧歌をもじって書かれたものである。また序文はスペンサーの『羊飼いの暦』に付されたE. K.による序文や、フィリップスの『牧歌集』の序文、さらにはティッケルが『ガーディアン』に連載した牧歌論に対する当てこすりが満ちあふれている。(29)

ゲイはこの牧歌において、近頃大きな騒動を巻き起こしている「黄金時代」には目もくれず、「シシリアやアルカディア」ではなく、英国の「正直で労の多い農民」の作法を正しく描写すると宣言する。自分の目的は英国の生き生きとした風景を読者に提示することである。この牧歌に登場する女羊飼いは、怠惰に葦笛を吹かず、雄牛の乳を搾り、麦束を縛り上げ、豚が道に迷えば小屋に追いたてる。羊飼いは英国の野原で育つ草花しか集めず、「天人花の木蔭」で眠ることはなく、生垣で羊を「狼」から用心深く守るのである。

一読すると「黄金時代」や「アルカディア」や「天人花の木蔭」など古典的な牧歌の特性を否定しているように思われるが、ゲイがポープと同じ方法によってフィリップスの英国化された牧歌を揶揄していることは明らかである。たとえばフィリップスは英国ではすでに絶滅した「狼」を第一牧歌に登場させているが、ポープは

フィリップスが「大いなる判断力を持って」英国の「狼」を描いていると『ガーディアン』第40号で皮肉っている。同様にゲイも「巨匠のスペンサーが見事に述べているように」英国には狼はいないと、フィリップスが模範としたスペンサーを引き合いに出して、フィリップスを攻撃する。

続けてゲイはスペンサーに矛先を向ける。『羊飼いの暦』は音楽性に欠け、牧歌に不適切な宗教的な問題を扱っている。ただしスペンサーが羊飼いに付けた「田園にふさわしく簡素な」名前は好ましいと思われるので借用することにする。またスペンサーは牧歌集を『羊飼いの暦』と名づけ、これを十二月に分割しているが、自分もこれに倣って六篇の牧歌に月曜から土曜までの題名をつけ、全体は『羊飼いの一週間』とする。自分の描く羊飼いはキリスト教徒であるから、日曜日は教会でお祈りを捧げる安息日としよう。スペンサーの牧歌は「一月」や「三月」などと呼ばれるが、季節を特定するものは何ら描かれていないので、この点も模倣する価値がある。

最後にゲイが非難するのは、スペンサーに倣ってフィリップスが採用した方言や俗語についてである。この牧歌に登場する羊飼いの言葉遣いは、田舎娘も都会の貴婦人も話さないようなもので、過去に使われたことはないし、未来にも使われることはないであろう。それは田舎じみていると同時に都会風であり、古代風であると同時に現代的でもある。つまりフィリップスの羊飼いが話す言葉は、いかなる時代にも、どんな場所にも存在しないものだというわけである。

ここで『羊飼いの一週間』から引用して、フィリップスをもじったゲイの詩風を見ておこう。「月曜日」の一節で、先に紹介したフィリップスの第六牧歌からの詩行をもとにしたものである。(30) まずロビン・クラウトが歌い、続いてカディが歌う。

LOB. On two near Elms, the slacken'd Cord I hung,
Now high, now low my *Blouzelinda* swung.
With the rude Wind her rump'd Garment rose,
And show'd her taper Leg, and scarlet Hose.

CUD. Across the fallen Oak the Plank I laid,
And my self pois'd against the tott'ring Maid,
High leapt the Plank; adown *Buxoma* fell;
I spy'd—but faithful Sweethearts never tell. (ll. 107-10)

二本の近い楡の木に、緩んだ綱を私が掛ければ、
高く、低く、ブラウズリンダはブランコをする。
強い風が吹いて彼女のしわくちやの衣がめくれ、
彼女の先細りの足と、真赤な長靴下が見えた。

檜の倒木に交差するように板を私は渡して、
よろめく乙女に対して私の体で釣り合いを取った。
高々と板が跳ねて、バクソーマは後にのけぞった。
私は見た、だが忠実な恋人は決して口にせぬ。

フィリップスが水浴の場面を描いたのに対して、ゲイはさらに猥褻の度合いを高めていることが一目瞭然であろう。羊飼いの名前であるロビン・クラウトとカディはスペンサーの『羊飼いの暦』に登場する羊飼いの名前を借用したものである。しかし女羊飼いの名前はいずれもゲイの創案によるもので、「ブラウズリンダ」(Blouzelinda)は「赤ら顔で顔の太った娘っ子」(blouze)から、また「バクソーマ」(Buxoma)も「奔放な、淫らな」(buxom)から作り出されたものである。(31)

この引用は英国の羊飼いの開放的な恋の戯れを描いたものだが、ゲイはフィリップスがスペンサーから借用した古語、たとえば子羊、大空、乙女を表わす *Younglings*, *Welkin*, *Damsel* などを多数散りばめ、また以下のように英国の植物を並べてみせる。

Fair is the King-Cup that in Meadow blows,
Fair is the Daisie that beside her grows,
Fair is the Gillyflow'r, of Gardens sweet,
Fair is the Mary-Gold, for Pottage meet.
But *Blouzelind's* than Gillyflow'r more fair,
Than Daisie, Mary-Gold, or King-Cup rare. (*Monday*, ll. 43-8)

草叢に咲き誇るキンボウゲは美しく、
彼女の傍らで育つヒナゲシは美しく、
庭の芳香たるアラセイトウは美しく、

羹に相応しいマリゴールドは美しい。

だがブロウズリンダはアラセイトウより美しく、

ヒナゲシや、マリゴールドや、キンポウゲより稀だ。

ゲイの『羊飼いの一週間』はフィリップスの英国風牧歌を揶揄するために書かれたものだが、作者の意図に反して英国風牧歌の可能性を広く知らしめる結果となった。逆に言えば、英国における古典的な牧歌はポープによって完成され、終焉を迎えたのである。

本論で取り上げた批評家たちの牧歌論には、テオクリトスやウェルギリウスの牧歌を模範と仰ぎながらも、黄金時代など自ら定めた概念や規則によって彼らを批判し、結果的に牧歌の枠組を狭めてしまう傾向が共通して見られる。テオクリトスが牧歌に方言を持ち込んだこと、田園で生活する者たちの猥雑性、羊飼以外の人物を歌い手に据えたことなどは、あっさりとは否定される。ウェルギリウスの第四牧歌は牧歌としては文体が崇高すぎ、第一牧歌や第九牧歌は戦争に起因する土地没収が描かれているから純粋な牧歌とは言いがたい。また漁師を主人公に起用したサンナザロの『漁夫牧歌』も、批評家たちの考える牧歌の定義にはあてはまらないとされる。本来はもっと豊かであったはずの古典的な牧歌は、狭い枠の中に閉じ込められてしまったのである。

しかし十八世紀の初めに起きた牧歌論争を通じて、英国の詩人たちはテオクリトスやウェルギリウスといった古典の模範から完全に離れることはないにせよ、牧歌の新しい可能性を求めて、さまざまな変種を生み出していくことになる。ロンドンの街中を舞台にして、羊飼いに見立てた上流階級を諷刺する都会風牧歌、海や川で漁師や釣り人が歌い交わす漁夫牧歌、ペルシアやドイツなどの外国を舞台にした異国風牧歌などがそれにあたる。これらについては別の機会に論じることになろう。

注

- (1) *The Dryden -Tonson Miscellanies, 1684-1709*, eds. Stuart Gillespie and David Hopkins, 6 vols (London: Routledge, 2008) 6: 12-61.
- (2) *The Idyllium of Theocritus; with Rapin's Discourse upon Pastorals*, trans. Thomas Creech, The Third Edition (1684; London: E. Curll, 1721) 1-51. リプリントは *Rapin's De Carmine Pastoralis*, intro. J. E. Congleton, The Augustan Reprint Society (Michigan: Ann Arbor, 1947)

- (3) “A Treatise upon Pastorals. By Monsieur De Fontenelle, Englished by Mr. Motteux,” *Monsieur Bossu’s Treatise of the Epick Poem* (London: Tho. Bennet, 1695) 277-95. リプリントは *The Continental Model: Selected French Critical Essays of the Seventeenth Century, in English Translation*, eds. Scott Elledge and Donald Schier, Revised Edition (Ithaca: Cornell University Press, 1970) 339-70.
- (4) モットーの英訳ではこの部分は書略されているが, *The Continental Model*, 399に編者による英訳が収められている。
- (5) J. E. Congleton, *Theories of Pastoral Poetry in England 1684-1798* (1952; New York: Haskell House, 1968) 70. 本論におけるラパンとフォントネルの牧歌論の要約については, コングルトンの記述に負うところが大きい。
- (6) Congleton, 75.
- (7) Knightly Chetwood, “Preface to the Pastorals, with a short Defence of Virgil, against some of the Reflections of Monsieur Fontenelle,” *The Works of Virgil in English 1697*, vol. 5 of The California Edition of The Works of John Dryden, eds. William Frost & Vinton A. Dearing (Berkeley: University of California Press, 1987) 37-56.
- (8) *The Dryden-Tonson Miscellanies*, 1: 243-9., 2: 140-163.
- (9) *The Dryden-Tonson Miscellanies*, 2: 26-7. また次の版も有益である。John Dryden, *Of Dramatic Poesy and Other Critical Essays*, ed. George Watson, 2 vols (London: Dent, 1962) 2: 30.
- (10) John Dryden, “Dedication of the Pastorals, to the Right Honourable Hugh Lord Clliford, Baron of Chudleigh,” *The Works of Virgil in English 1697*, vol. 5 of The California Edition of The Works of John Dryden, eds. William Frost & Vinton A. Dearing (Berkeley: University of California Press, 1987) 3-8. また *Of Dramatic Poesy and Other Critical Essays*. 2: 216-22.
- (11) *The Letters of John Dryden*, ed. Charles E. Ward (Duke University Press, 1942) 127-8. また *Of Dramatic Poesy and Other Critical Essays*. 2: 267-8.
- (12) John Dryden, “Postscript to the Reader,” *The Works of Virgil in English 1697*, vol. 6 of The California Edition of The Works of John Dryden, eds. William Frost & Vinton A. Dearing (Berkeley: University of California Press, 1987) 809. また *Of Dramatic Poesy and Other Critical Essays*. 2: 261.

- (13) William Walsh, “Prefatory Essay on the Nature of Letter-Writing, Pastorals, &c,” *The Works of William Walsh, Esq: in Prose and Verse* (London: E. Curll, 1736) viii-x.
- (14) Joseph Spence, *Observations, Anecdotes, and Characters of Books and Men*, eds. James M. Osborn (Oxford: Clarendon Press, 1966) 2: 32.
- (15) *The Correspondence of Alexander Pope*, ed. George Sherburn, 5 vols (Oxford: Clarendon Press, 1956) 1: 7.
- (16) Alexander Pope, “A Discourse on Pastoral Poetry,” *Pastoral Poetry and An Essay on Criticism*, vol. 1 of The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope, eds. E. Audra and Aubrey Williams (London: Methuen, 1961) 23-33.
- (17) *Oxford and Cambridge Miscellany Poems*, ed. Elijah Fenton (London: Bernard Lintot, n. d.) 41-69.
- (18) *The Letters of Joseph Addison*, ed. Walter Graham (Oxford: Clarendon Press, 1941) 230.
- (19) *The Correspondence of Alexander Pope*, 1: 100-1.
- (20) Ambrose Philips, preface, *The Poems of Ambrose Philips*, ed. Mary G. Segar (Oxford: Basil Blackwell, 1937) 3.
- (21) *The Letters of Joseph Addison*, 49.
- (22) *The Spectator*, ed. Donald F. Bond, 5 vols (Oxford: Clarendon Press, 1965) 2: 367, 4: 362-3.
- (23) *The Guardian*, vol. 13 of The British Classics (London: C. Whittingham, 1804) ティッケルによる牧歌論は以下の五編である。No. 22 (April 6, 1713) 108-112, No. 23 (April 7) 112-116, No. 28 (April 13) 137-40, No. 30 (April 15) 147-51, No. 32 (April 17) 157-61.
- (24) *The Guardian*, No. 40 (April 27, 1713) 197-205. ポープの牧歌論である。なお鈴木善三「十八世紀における牧歌論争の背景」『英文学研究』40 (1964) 17-33. はポープとフィリップスの牧歌の相違について詳説した優れた論文である。鈴木氏の牧歌論は増補改訂されて『講座英米文学史 第2巻 詩II』(大修館書店, 2001) 176-88. に収められている。
- (25) *The Dryden -Tonson Miscellanies, 1684-1709*, 58.
- (26) *The Dryden -Tonson Miscellanies, 1684-1709*, 649.

- (27) *The Works of Virgil in English 1697*, 89. 初版で97行目は “With pelted fruit me Galatea plies” (ガラテアはせっせと私に果実を投げつける) という表現であった。原文で女性名はガラテアになっている。ドライデンが変更した理由は不明である。
- (28) *Theocritus*, ed. & trans. A. S. F. Gow, 2 vols (Cambridge: The University Press, 1952) 1: 47. 林檎は愛のしるしであるという。2: 107.
- (29) John Gay, *Poetry and Prose*, eds. Vinton A. Dearing & Charles E. Beckwith, 2 vols (Oxford: Clarendon Press, 1974) 1: 90-2. 注釈が有益である。2: 515-8.
- (30) John Gay, *Poetry and Prose*. 1: 100, 2: 522.
- (31) John Gay, *Poetry and Prose*. 2: 523., *Samuel Johnson's Dictionary of the English Language*, ed. Alexander Chalmers (1843: London: Studio Editions, 1994)

本研究は科研費 (23520317) の助成を受けたものである。